

## 小諸の記憶

例年より遅い梅雨入りになった6月初めの早朝、都心を抜けて関越道に入った時の雨足は、ワイパーも効かないほどの土砂降りだったのに、高崎から長野道へと分岐して妙義山の奇怪な山容が見えた頃にはすっかり晴れ渡り、碓氷峠を一気に登りきると、澄みきった青空の下、軽井沢の街が別世界のように広がっていた。納品先の別荘は、町役場を右に星野温泉へと上る山道の中腹に、さえぎるもののない雄大な浅間山が目の前に横たわる絶景の斜面に建っていた。

昼過ぎには仕事も終わり、依頼主の女性を旧軽井沢駅まで送りがてら、改札口横の売店で器もまだ暖かい「峠の釜飯」を買って、遅めの昼食を誰もいない待合室のベンチに座ってゆっくり味わうことができた。夏の避暑シーズンにはまだ早いからか行きかう人も少なく、いつかの静寂に駅も街もがつつまれているようだ。

軽井沢から小諸まで続く国道は、ゆるやかな下り坂になっていて、梅雨とは思えない爽やかな初夏の風が吹き渡る快適な高原ロードが続いていた。雨に洗われた空気はさらに澄み渡り、青い空に真綿の白雲が浮かび、右手には浅間山が優雅な緑のスカートを広げている。「追分」とか「馬」のつくいくつか地名を過ぎると、ほどなく「小諸市街←」の標識が見えた。旧道沿いには、墨色にくすんだ家構えの商店が建ち並び、北国街道のいにしへの旧宿場町らしい佇まいを見せてくれる。ロータリーになった広い駅前広場の正面に小諸駅の駅舎があった。タクシーが数台客待ちをしている横で、小さなバスが乗客もいないまま発車を待っている。ゆっくりと駅前をひと回りして、車をとめる駐車場を探す。

パーキングの看板を左に曲がると、上り線ホームに沿った空き地が、広い市営駐車場になっていた。道向かいの倉庫風の大きな建物には日通の文字がころうじて残っているところをみると、かつては国鉄貨物ヤードで、その当時は林檎箱や味噌を積み込んだ長い貨物列車で賑わっていたのだろう。



ホームのすぐ横、フェンス一枚を隔てて後ろ向きに車を止める。

閑散とした敷地には、見回しても人の姿は見え、駅の南側の懐古園あたりの空の上には、藤村の歌のままの白雲が浮かび、駅前の土産物屋に客の姿はない。店番の老婆がうたた寝をして、アーケードの下を歩く人もない。静かな午後の時間が流れていた。

駅舎を訪れる前に、街の雰囲気味わってみようと、駅前からアーケードが伸びている通りの方へ歩いてみる。土産物屋の先に「信州そば」の看板が下がったカウンターだけの小さな店があった。ちょうど奥にいた50歳がらみの女店主と目が合って、釜めしを食べたばかりだったが、ざるそばぐらいなら腹に入るかなど「いらっしゃい」の声に引かれるままのれんをくぐってしまった。よくメニューを



見もせず、ざるそばをと注文した後、小学生の頃長野へ引っ越してすぐ、初めて善光寺門前の蕎麦屋に入った時、出てきた蕎麦の汁のあまりの黒さに、家族みなびっくり腰を抜かしたことを思い出した。壁の品書きをあらためて見ると、その中に「きざみそば」という見なれないメニューがあった。そばを茹でていた女主人に尋ねると、「きざんだうす揚げが入ってる蕎麦ですよ」との答え。そうか、きつねそばみたいなものかと納得しながら、その横に色褪せた商店街の地図が貼ってあることに気がついた。近付いてよく見ると、この少し先に云々金物店と、ラジオ商会云々と名前をつく店が載っていた。紙の端も破れて、いかにも古そうな地図にいささかの危惧も覚えつつ、これは年代物の掘り出し物が期待できそうだと思いながら、茹で上がったばかりのひさしぶりの本場信州蕎麦の味を味わった。

そば店にあった骨董品地図をたよりに、歩道に沿って続いているアーケードの下を先に進んでみる。歯が抜けたように、シャッターが閉まったままの店が多い。それらしき店が見当たらないまま、いくつかの交差点を過ぎてしまった。おかしいかと引返しながらか、壁に消された名前がないものかと探してみたが、けっきょく金物店もラジオ商会も見つかることはなかった。



駅舎の先に見えた、長い渡り廊下のような跨線橋には「懐古園方面」の看板がかかっていた。その線路横の空き地に、蔦におおわれた煉瓦造りの建物が残っていて、かつての保線区か操車場の跡地のようだ。広い敷地は、花やハーブなどの植物が植わったガーデニング公園になっているらしく、とつつきの丘に瀟洒な山小屋風のカフェがあった。吹き渡るかぐわしい風に誘われるまま、遊歩道をたどり着いた店内には、杏子やリンゴのジャム、小さな鉢に植わったハーブや野草などが売られていた。

ほかに客もいないテーブルで、軽井沢駅でもらっていた「しなの鉄道ガイド」をパラパラめくっていると、観光客と思われたらしく、温室で水やりをしていた白い割烹着姿の女性が「これのほう

が詳しい地図が載っていますよ、どうぞ」と折畳み式小諸散策マップを渡してくれた。

藤村にゆかりの場所や、古い商家、周辺の神社などの散策案内が紹介されていた。

庭の植え込みの間を、大きな犬を連れた女性が散歩している。線路の向こう側にある懐古園の鬱蒼とした杜から涼しい風が入ってくる。もらった小諸地図を広げて、しばらくぼんやり眺めていた。近在にはたくさんの神社が点在していて、賑やかな祭りの写真が載っていた。割烹着の女性がレジに座って、なぜかこちらの方に視線を向けている。店を出て庭の植え込みを抜け駅舎まで歩いて行くと、ちょうど下校時間なのか列車通学の高校生達が集まりだしていた。駅の構内は静かな気配が漂っていて、天井の高いホールは外よりもさらに涼しく、手前の1番線ホームには、軽井沢行きの



電車が停車している。右手に出札窓口、正面に改札口があり、その上には大きな丸時計と、明るい電照式の時刻表があった。小海線と、しなの鉄道が別々になっていて、上り方面は全て軽井沢止まり、下り方面は長野止まりになっている。時間帯によっては1時間に1本程度のこともあるし、そのほとんどにはワンマカーの表示がついている。ひと昔前までは、上野行きや金沢、富山行きの長大編成の優等列車が行き交った華やかな時代があったことが夢のようだ。軽井沢の先、碓氷峠にはもうレールさえも無いのだ。待合室は左手のガラスで仕切られた壁の奥にあるようだ。壁際には無造作に並べられた籠の野菜に混じって、信州名物「おやき」も並んでいる。

煤けたガラスの向こうに待合室があった。殺風景な20畳ほどの広さの部屋に青いプラスチックの椅子が並び、薄暗い蛍光灯に照らされて、よどんだ空気が漂っている。数人の高校生が背中を向けて座っている。隅には背の高いガラス窓のついた年代物の冷蔵庫があり、埃がこびりついたガラス扉の中に、味噌の包みが並んでいるようだ。売り物ではないらしく、扉には鍵がかかっている。振り返った後の壁に、フーテンの寅さんの小諸ロケ当時の様子の色褪せた写真が、もう何年もずっとそのままに貼ってあるようだ。昭和63年とあるから、わずか20数年前のことなのに別の世界の出来事に思える。列車案内のアナウンスが、柔らかな女性の声で流れている。後ろの席に座り、待合室の時間の流れに溶け込もうとして目を閉じてみる。せまく薄暗い部屋は、静かなよどみの気配に満ちていて、お喋り好きな女生徒達もなぜかおとなしく、それぞれの思いに入り込んでいるようだった。



ふとカフェでもらった小諸マップを手にしていることに気がついて、もう一度開いて眺めてみた。藤村ゆかりの町並みや、高濱虚子の散歩道、そして味噌問屋や材木商だった旧家の古い建物が市内に点在していることがわかる。そんなページの裏に、近在の寺や多くの神社の写真などもあった。鹿島神社、結城神社、八幡神社、健速神社(たてはや、とルビがふってある)などのお社の写真と大祭の時の賑やかな境内の様子が紹介されていた。いかにも寅さんの戸板屋台が出ていそうな祭りの雰囲気溢れている。狭い田舎町にしては、大小の神社が多いのは何か理由があるのだろうか。ぼんやりそんなことを考えていると、ひとつの記憶がよみがえってきた。

安寿子ちゃんの家は、さびれた商店街の外れにある小さな豆腐屋だった。彼女は小学生とは思えない、どこか大人びた陰りを感じさせる雰囲気を持っていた。裕福ではない家の彼女が、中学を卒業したあと高校へ進学せずに、小諸にある神社の巫女さんになったらいいと、風のたよりに聞いたのか、それとも手紙をもらったのか記憶が定かではなくなっているが、巫女さんという言葉の響きにどこか秘密めいたものか感じられて、人買いに売られた安寿と厨子王の物語にダブらせてしまい、なにか関わるのが憚られて、連絡をとることもなくなってしまった。

あれは小学5年生の冬、誰かの誕生日会だったのか、安寿子ちゃんの家の小さな豆腐屋の

2階に、5, 6人の仲良しグループが集まって誕生日会を開いていた。そのうち誰が言い始めたのか、鬼ごっこをやろうということになって、それも2階の部屋の電気を全部消して、鼻をつままれてもわからない真暗闇の中で走りまわり、歓声をあげながら追いかけては逃げまどい、男子は私ともう一人ぐらいで、そのうちに女子達に追いかけられる展開になり、何かに躓いて板の間にうつぶせに倒れた私の背中に、安寿子ちゃんが跨がる成り行きになってしまった。馬乗りになった姿勢のまま、締め付けてくる安寿子ちゃんのお尻の柔らかさと温みの感触。その記憶はそのあと何年も思い出すこともなかったのに、二十歳を過ぎたころ、何かの拍子に突然よみがえってきた。暗闇鬼ごっこ遊びは、そののちグループの特別な遊びになり、誰かの家に集まっては繰り返し行なわれることになった。性に幼い男子達は、すでに初潮を迎えて先に大人になりかけた女子達に翻弄されていたようだ。クラスの女子だけが教室に集められた日、男子達は校庭で無邪気に走り回ることはできなかったのだから。

気がつくとき待合室には私ひとりしかいなくて、長野行き快速電車が案内アナウンスとともに発車していった。安寿子ちゃんに会うためには、あの電車に乗れば小学生の彼女がまだ教室に残っているのだろうか。それともこのパンフレットにあるどこかの神社を尋ねてみれば、いまでも16歳のまま巫女装束に身を包んだ彼女に会えるのだろうか。そんなはずはないとは思いながらも、この地図で一番大きな神社に行ってみて確かめてみたい衝動を押さえきれなかった。

改札口の柱にある丸時計を見ると、この待合室に座ってからいつの間にか、もう小1時間時間が過ぎていた。

外に出ると、街はすっかり夕暮れの気配に包まれていて、広い駐車場に私の車だけが、ポツンと一台だけ忘れられたように取り残されていた。



街並みを抜けしばらく坂を登るように走ると、高速道路の入口は市街地を見下ろす山の中腹にあった。空の高みに浮かんでいた白い雲が、手を伸ばせば届きそうな近くにあり、千曲川の川筋が白くうねりながら光っている。今でも彼女はこの街のどこかにいるのだろうか。誰とどんな暮らしをしているのだろうか。道路は大きく南へ迂回して、佐久のインターを過ぎると、長いトンネルに入った。手元の地図を見ると、八風山トンネルという名前らしい。交通量は少なく、前後を見はるかしても他に車は見えない。どこまでも続く暗闇に不安を覚えた時、突然光の中に飛び出していた。ドライバーズハイというのか、混濁した意識のなかありえない啓示に打たれハンドルを取られた。さっき駅前のガーデンカフェで、小諸の地図を手渡してくれた割烹着の女性の柔らかい仕草と優しい声の調子が、記憶のなかの安寿子ちゃんとソックリ似ていたことだ。こちらに視線を向けていた彼女はなにを見ていたのだろうか。まさかそんな奇蹟のような偶然があるはずもないと自分に言い聞かせながらアクセルを踏み込む。

後戻りの出来ない高速道路の白い道は、碓氷峠を一直線に下ってどこまでも続いていた。

